

「宗教改革と聖書(神の言葉)」

詩編 119編9～16節

聖学院大学 大学チャプレン・政治経済学部チャプレン 菊地 順

今日から、シリーズ礼拝が始まります。毎年秋学期には、このシリーズ礼拝を行っていますが、今年も宗教改革 500 周年を覚えて、「御言葉に聞く—宗教改革 500 周年を覚えて—」とのテーマで、約 1 カ月に渡り、シリーズ礼拝を守ります。今日は、その第 1 回目です。

今から 500 年前の 1517 年 10 月 31 日に、後に宗教改革者と呼ばれるようになったマルティン・ルターは、ヴィッテンベルクにあったお城のような形をした城教会の扉に、いわゆる「95 か条の提題」を貼り出しました。当時、ルターは修道僧でしたが、また同時に神学博士としてヴィッテンベルク大学の聖書の教授でもあり、この「95 か条の提題」は、学問上の討論会を呼びかけるために張り出されたものでした。当時、大学の教授は、公開の討論会において自分の考えを公に示すことが義務付けられていました。そのためルターも、そうした討論会を開こうとして、自分の考えを「95 か条の提題」にまとめて公にしたのです。ですから、普通でしたら、一部の学者や学生たちが集まって討論会が開かれただけで、一般の人たちには特に目に触れることもない一つの行事として終わっていたはずですが、この時は違っていました。ルターが掲げた「95 か条の提題」は、「わずか 2 週間ほどで全ヨーロッパを駆けめぐり、大反響を引き起こした」(徳善義和著『マルティン・ルター』、61 頁)のです。なぜなら、この「95 か条の提題」で述べられていた内容が、当時のヨーロッパ・キリスト教世界を根底から揺さぶるような内容を、含んでいたからです。

それは、キリスト教の「救い」に関するものでした。「救い」をどう理解するかは、キリスト教の根幹に関わる大問題です。その重大な問題に、ルターは、いわばメスを入れたのです。そして、教会の従来の考え方を根本から批判し、人はキリストによってもたらされた贖いの恵みによってのみ救われると語ったのです。それまでは、神のみ心を示す「律法」を守ることによって救われると考えられていました。そうした「行い」が大事だと考えられていたのです。特に、罪を犯し、悔い改めたとき、その償いとして「良い業」を行うことが求められていましたが、その当時、その「良い業」は、教会が発効していた償いを免除する「免償符」を買うことによって代用できるとされていました。そして、人々は、特にドイツを中心に、その「免償符」を半ば強制的に買わされていたのです。こうした現実に直面して、ルターは、人が救われるのは、そのような「免償符」を買うことによってではなく、キリストが十字架において成し遂げてくださった贖いの救い、身代わりの救いを受け入れることによってであると語ったのです。そして、そのことこそが、神の前に正しいとされることだと語ったのです。ルターは、このことを「信仰義認」と呼びました。キリストの身代わりの贖いの救いを受け入れる信仰こそ、神の前に正しいとされる、すなわち義とされることだと語ったのです。

ルターは、こうした確信を、聖書を徹底的に読むことによって獲得して行きました。そして、そこに、

宗教改革の大事な精神があります。すなわち、それは、キリスト教の原点であり、源泉である聖書に立ち帰るということでした。そして、これは、当時盛んになっていた人文主義の精神でもありました。皆さんは、高校の世界史の授業で、「エラスムスが卵を産み、ルターがそれを孵した」という言葉を聞いたことがあるのではないかと思います。エラスムスとは、当時の著名な人文主義者でしたが、エラスムスは「源泉に帰れ」ということを唱えました。源泉とは、ギリシャ・ローマ文化のことでしたが、キリスト教においては、それは聖書でありました。そして、エラスムス自身、それまではラテン語訳の聖書が用いられていましたが、新約聖書の原典であるギリシャ語の聖書を校訂し、それを出版したのです。元々の言語のギリシャ語で書かれた聖書に立ち返ったのです。そして、後に、そのギリシャ語の聖書をドイツ語に翻訳して新約聖書を出版し、人々が直接母国語で聖書を読めるようにしたのがルターでした。そのようにして、エラスムスもルターも、人々をキリスト教の源泉である聖書へと導いたのです。そのため、人々は、その聖書を通して、直接に、聖書の語る世界に触れることができるようになり、それが宗教改革の原動力ともなったのです。

このように、ルターは聖書を大変重視しましたが、それはまた、ルター自身の歩んだ歩みでもありました。今日は、詩編 119 編を開いていますが、ルターは詩編を大変愛し、繰り返し詩編についての講義(授業)を行った人でもあります。詩編は、聖書の中の聖書とも呼ばれることがあるように、聖書の内容が凝縮して語られている文書の一つと見なされていますが、ルターも、修道院時代、この詩編を繰り返し読みました。読んだというより、読まされたと言った方が正しいかもしれません。というのも、ルターが入ったアウグスティヌス派の修道院では、毎日詩編を読むことが定められていたからです。すなわち、修道士たちは、毎日朝の 3 時から夜の 9 時まで、3 時間ごとに、日に 7 度「定時の祈り」(定時禱)というのがあり、そこで詩篇を繰り返し唱えたのです。そのため、詩編は全部で 150 編ありますが、1 日 7 回の祈りで 50 編ほどを唱えることになります。そのため、1 週間で 2 回、詩編のすべてを唱えることになるわけです。そして、これを毎週繰り返したのです。それは、正に「詩編漬け」の日々であったと言えます(以上、徳善、20 頁)。そのようにして、徹底して詩編に親しむ中で、ルターは、聖書が語る福音の本質を学びとって行ったのです。ルター自身、徹底的に聖書を読み、それに親しんだ人なのです。そして、そうした中で、聖書に書かれている福音をもう一度新しく学び取って行ったのです。

ルターは、聖書を「神のことば」とも呼んでいます。この聖書について、こう語っています。「魂が神のことば以外のあらゆるものをなしで済ますことができるが、神のことばがなければ、他のどんなものをもってしてもなんの助けにもならない」、あるいは「魂が神のことばをもっているなら、もはや他のどんなものも必要としない」と語っています(『ルター著作選集』271 頁)。そして、その言葉に続けて引用しているのが、今日皆さんと一緒に読んだ詩編 119 編の言葉なのです。特に、若い学生の皆さんには、9 節の言葉に心を留めていただきたいと思います。そこには、こう記されています。「どのようにして、若者は歩む道を清めるべきでしょうか。あなたの御言葉どおり道を保つことです」。聖書の言葉に聞き従う中であって、その身が清く保たれるというのです。それは、そうした従うべき言葉なしには、人は正しく生きることはできないということでもあると思います。聖書は、そうした人間が聞き従うべき言葉を、「神の言葉」と呼んできました。そして、キリスト教は、2000 年にわたって、イエス・キリストの言葉と、それを記した聖書を「神の言葉」として受け容れ、それに基づいて歩んできました。そして、そこに多くの

人たちが、救いと励ましと希望を見てきたのです。

これから約 1 カ月、シリーズ説教として、宗教改革 500 周年を覚えながら、改めてこの御言葉について語られていきます。是非、一つでもいいですので、聖書の言葉に出会って欲しいと思います。そして、そこから、生きる力と希望を得て行って欲しいと思います。

2017 年 9 月 29 日 聖学院大学 全学礼拝奨励(シリーズ礼拝)